

世界経済評論 IMPACT

■セイトカアワダチソウと薄(すすき)

大東和 武司(広島市立大学国際学部教授)

2012.12.24

1970年代初めだったであろうか、ラジオ「秋山ちえ子の談話室」での「セイトカアワダチソウと薄(すすき)」の話が、なぜか記憶に残っている。外来種と在来種がそれぞれの勢力範囲を競って、せめぎ合いをしている。薄がその生息範囲を次第に狭めてきた。日本古来の風景が消えてきた。といった話であったように思う。

セイトカアワダチソウ(背高泡立草)は、北米原産で明治末期に園芸用に日本に持ち込まれたが、全国に拡まった大きな要因は、第二次大戦後、米軍の輸入物資に付着した種子だと言われている。秋になると、薄などでおおわれていた空き地や野原が、あるいはまた休耕田が、次第に、しかし急速に、派手な黄色に染まっていった印象がある。セイトカアワダチソウのアレロパシー(他感作用)、いわば毒素的化学物质の放出によって、すでに繁殖している植物に阻害作用を与え、それが薄などの駆逐の一因となった。

今年の11月初め、学生たちと島根県邑智郡美郷町比之宮地区に、休耕田を利用した淡水魚ホンモロコ養殖準備の手伝いに行った。高齢化率も50%に近く、最近の言葉でいえば、限界集落一步手前の準限界集落となるのだろう。元気なく、休耕田も多く、荒れた田畑の多い、などといった先入観を持っていた。しかし、その先入観は、比之宮の田畑の畔、法面を見た瞬間に一掃された。きれいなのだ。手入れが行き届いていたのだ。「心が洗われる」という言葉がふさわしい景色だった。誤解を恐れずいえば、これだけでも観光資源になる。道中の市町、とくにそれらの中心部と比べても差は歴然としていた。昨年の3.11東日本大震災の直後、世界銀行や国際通貨基金のスタッフの間からはじまり、やがて世界中に広がった「日本に学ぶ10のこと」

([http://www.youtube.com/watch?feature=player\\_detailpage&v=vIUhd4xof4g#t=14s](http://www.youtube.com/watch?feature=player_detailpage&v=vIUhd4xof4g#t=14s))、そのなかの「冷静さ」、「品格」、「思いやり」、「秩序」、「犠牲的精神」、「やさしさ」、「しつけ」、「良心」などの言葉が浮かんできた。ホンモロコの初収穫は1年後の2013年11月ごろの予定だ。比之宮に似合う薄も植生していた。

薄は、90年代半ばより、盛り返し傾向がみられるそうだ。セイトカアワダチソウが他の植物を追いやり、土壌の養分を吸収してしまうと、自らが排出する物質によって自らに害が及ぶようになった。他への攻撃性が自らに向けられるようになった。いわば、排他的であったがゆえに、衰退していったといえる。薄が復活・再生し、淡い中間色の秋の風景が戻ってきている。

2011年の主要品目の国内シェアをみると(日経産業新聞、2012年7月30日付)、ベスト3に入っている外資系は、生保などはこの調査の対象外であったが、洗剤、シャンプー・リンス、映画などまだまだ限られている。しかし、世界シェアをみると、造船、粗鋼、洗濯機、冷蔵庫などはベスト5に日本勢はなく、デジタル関連も苦戦し、中国勢が躍進し、韓国勢も依然として強さを見せている。欧米企業などの強い分野も多い。日本勢は復活するのだろうか。逆に、国内でも次第に苦戦を強いられるようになるのだろうか。

群生に時間のかかる薄は、植生の過程で土地を育て、地力をつける。土地ができれば、アカマツなどが生えてくる。かなりの年月を要するだろうが、稲科の薄一面から樹木群へと変わっていく。動物などがそのなかで育てば、多様性が広がり、生態系として深まりをみせる。薄が群生し土をつくり、土地に樹木が、さらに動物などが集まるといふ展開は、明らかにセイタカアワダチソウとは異なる変移だ。薄も第二次大戦後、北米に種子が渡り、勢力を広げたようである。薄の北米での遷移はどのようであったのだろうか。興味深い。

古くからある在来種が淘汰の危機に直面しながら復活・再生した。復活・再生には DNA が残っていることが大切だ。DNA などと難しいことは言わなくても、人間社会の場合であれば、「信用」「信頼」だろう。いかなる場所、局面であっても、人間と人間とが、互いに素直に対峙をすることが「信用」「信頼」につながり、それを積み重ねていくことが必要だ。企業の存続でも同様であろう。「信用」「信頼」の維持、あるいは何らかで失ったそれらを再び得るには、例えば、さきの「日本に学ぶ 10 のこと」(「技術力」も含めて)を日々日常的に行っているのか、ルーチン化できているのかということなのだ。それは高齢者、先達からの学びであり、歴史からの学習であり、それを今日に実践する覚悟なのかもしれない。また、それができれば、今後生じる大きな課題、あるいは危機への想像力と行動力へと連ねることもできるだろう。

キーワード: [国際競争力](#)